前

入学試験問題

国語（文科）

（配点一二〇点）

令和七年二月二十五日　九時三〇分～一二時

注意事項

一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。

二、問題はすべて新課程と旧課程とに共通です。

三、この問題冊子は全部で二十四ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。

四、解答には、必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用しなさい。

五、**解答用紙の指定欄に、受験番号（表面二箇所、裏面一箇所）、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。**

六、**解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。**

七、**解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。**

八、**解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。**

九、この問題冊子の余白は、草稿用に使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。

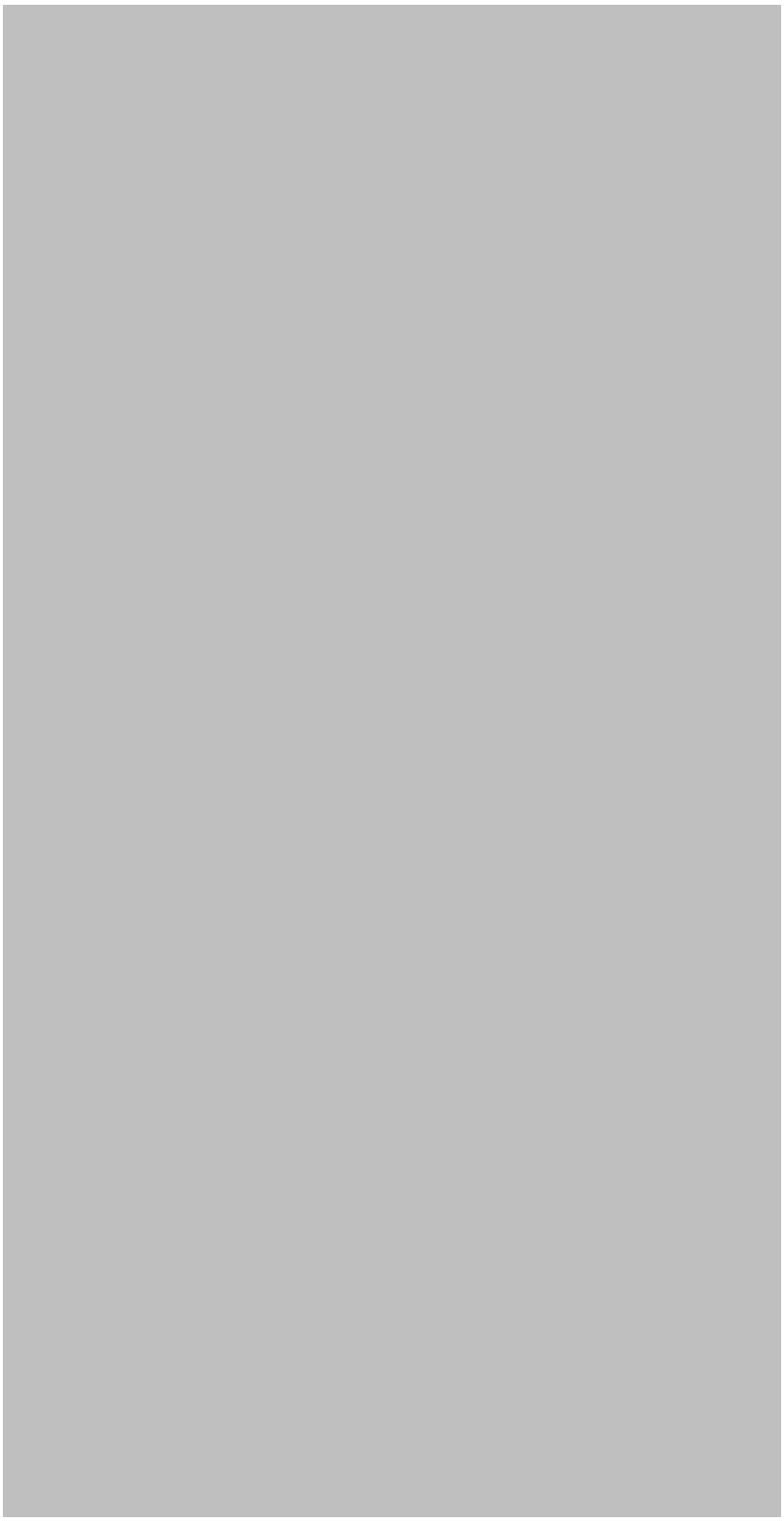
十、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。

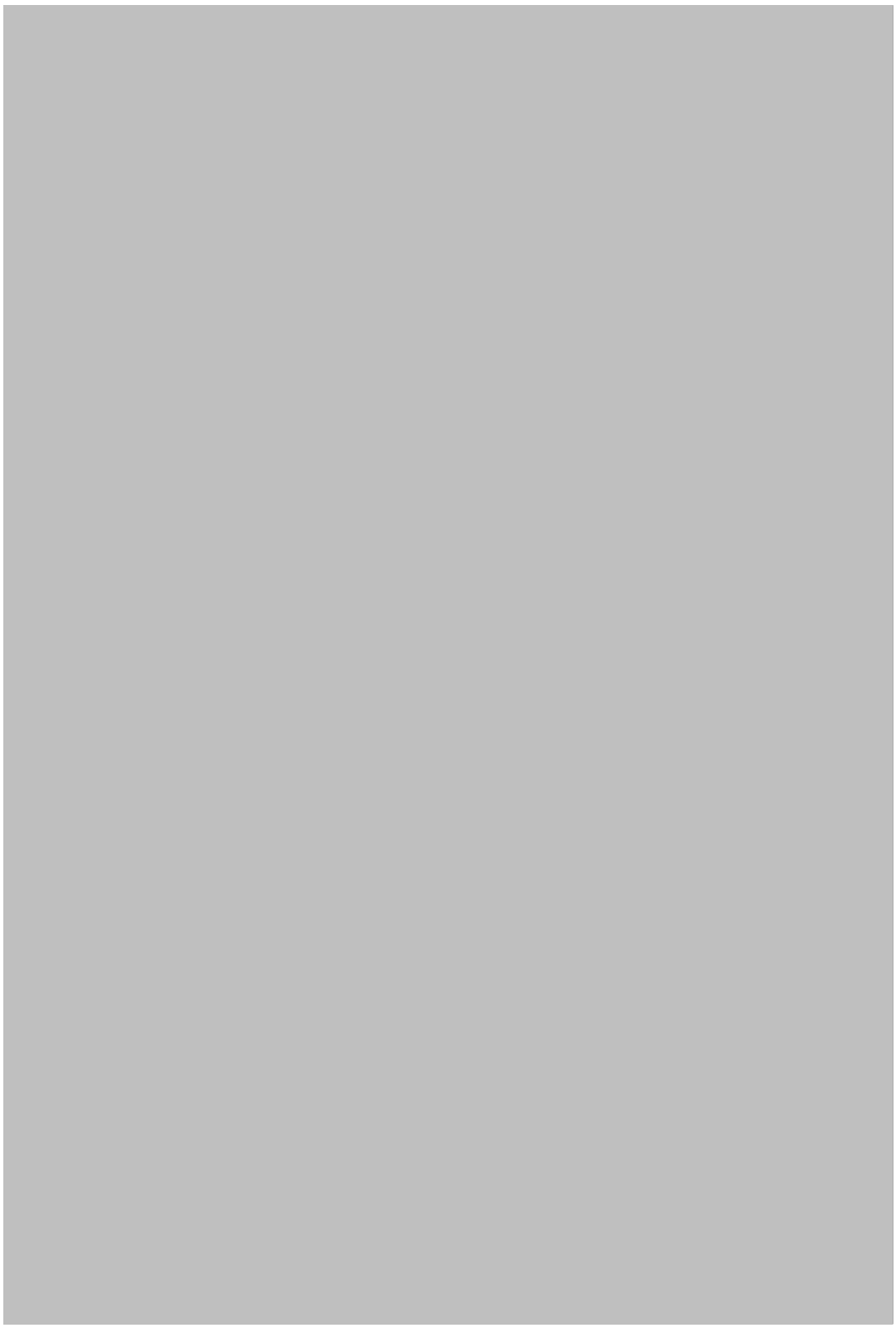
十一、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

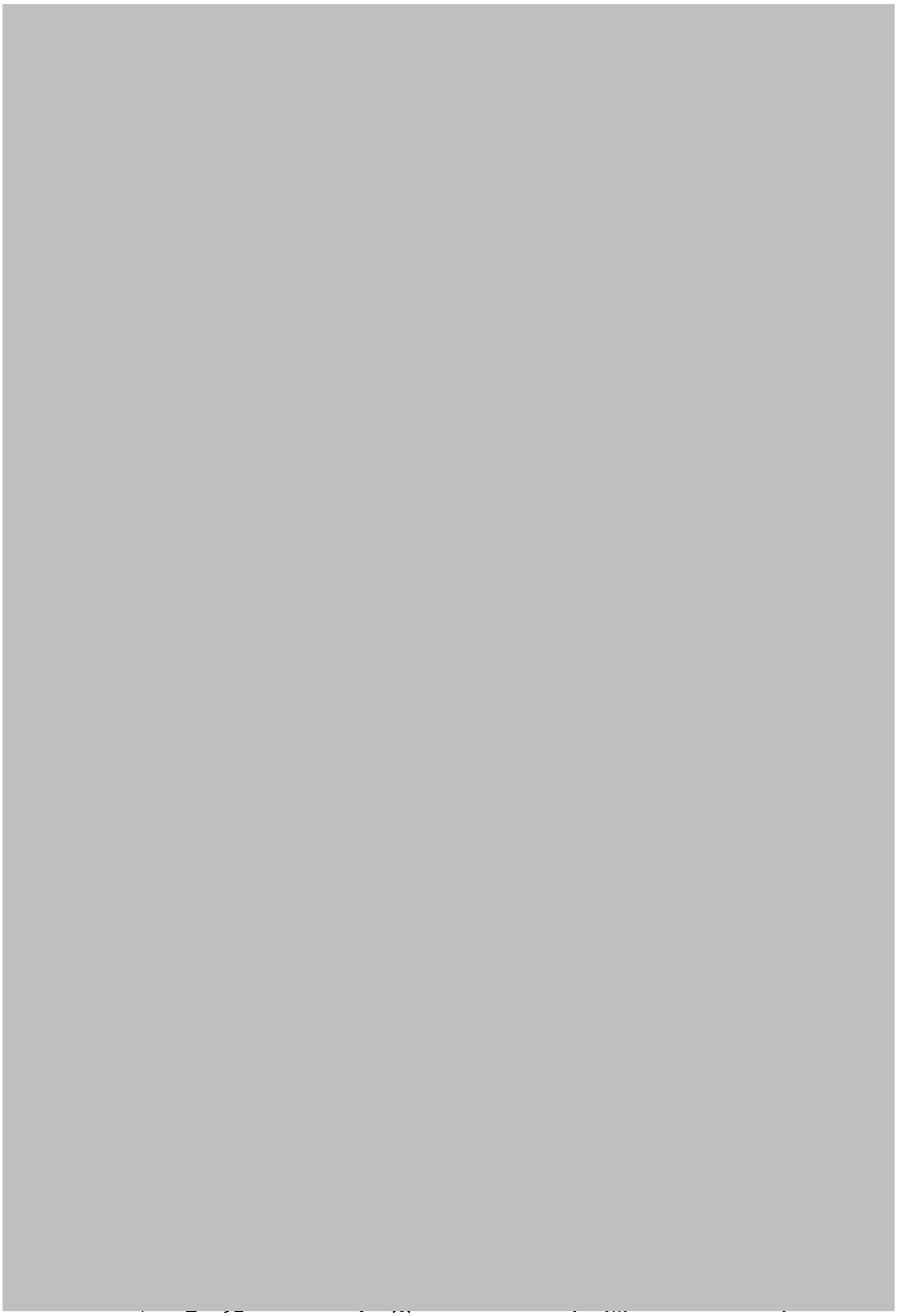
草稿用紙（切り離さないで用いよ。）

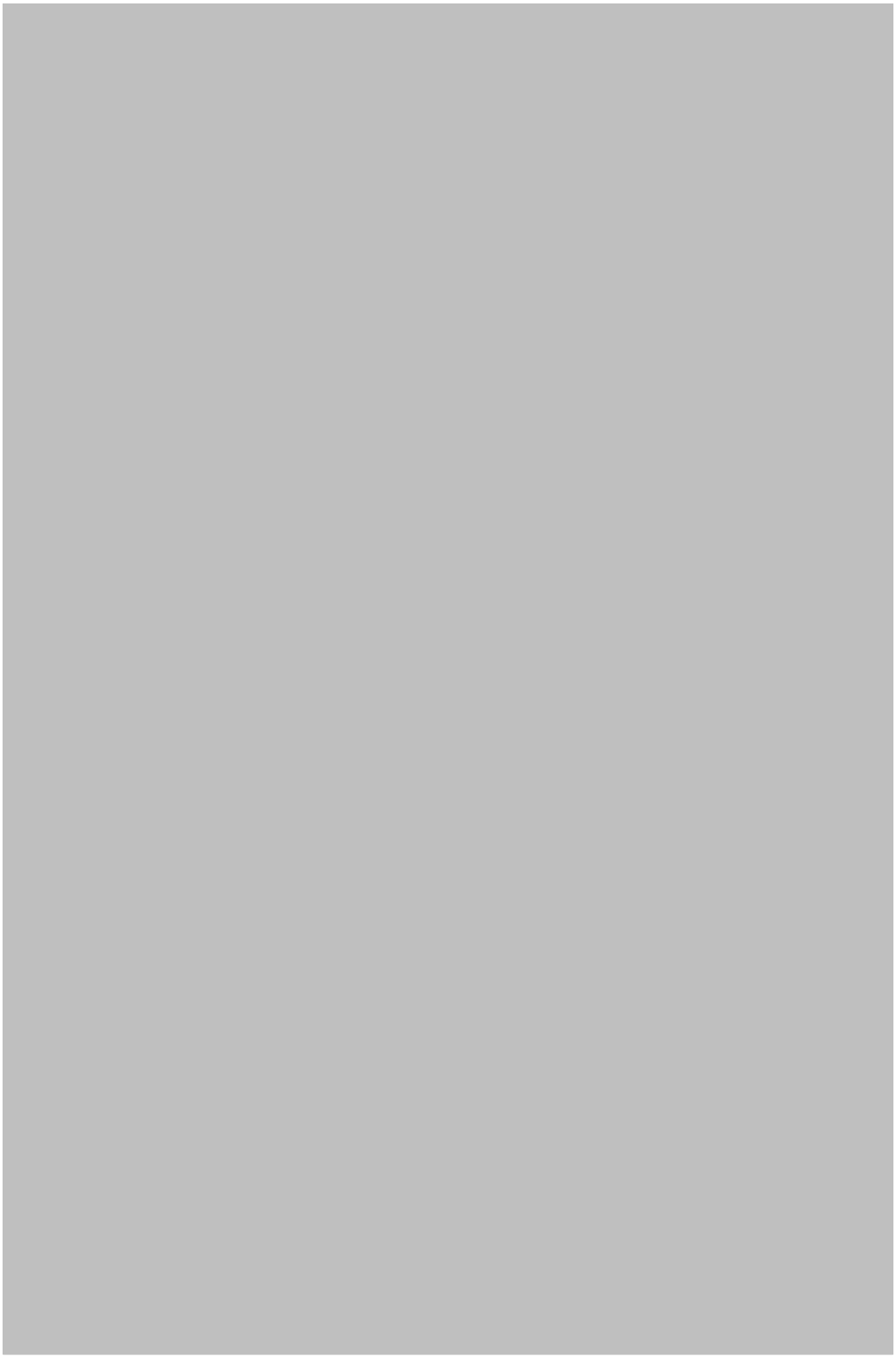
第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

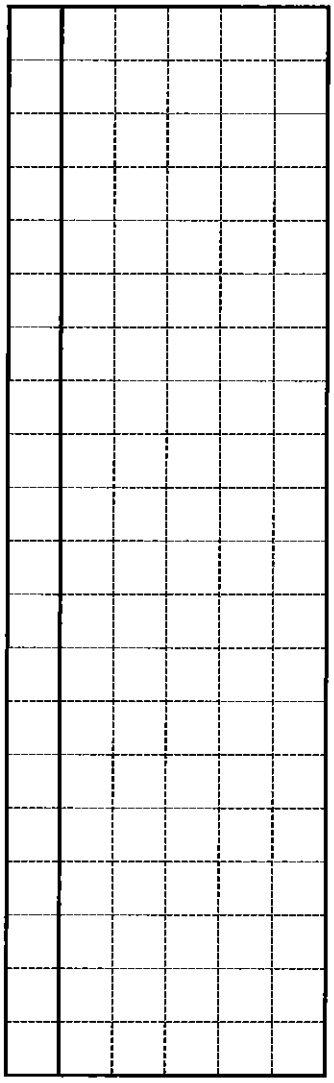








草稿用



第二問

次の文章は『撰集抄』の一話である。これを読んで、後の設問に答えよ。

昔、御室戸の法印隆明といふ、やんごとなき智者、もろこしに渡り給はんとて、西の国におもむきて、播磨の明石といふ所になん住みていまそかりけるに、ア<u>あさましくやつれたる僧の</u>、来たりて物を乞ふ侍り。さながら赤裸にて、ゑのこを脇に抱き侍り。人、後先に立ちて、笑ひなぶりける。あやしの者やと思して見給へば、清水寺の宝日上人にていまそかりける。イ<u>ひが目にや</u>とよく見給へど、さながらまがふべくもあらざりければ、ウ<u>かきくらさるる心地</u>して、伏しまろびて、「あれはめづらかなるわざかな」とのたまはせければ、上人ほほゑみて、「まことに物に狂ひ侍るなり」とて、走り出で給ふめるを、人あまたして、取りとどめ奉らんとし侍りけれども、さばかり木暗き繁みが中に入り給ひぬれば、エ<u>力なくやみ侍りけり</u>。

隆明法印は、あまりすべき方なく悲しく覚え給ひて、その事となく、その里にとまり居給ひて、広く尋ねいまそかりけれども、その後はまたも見えずなり給ひにき。さて里の者にくはしく事の有様を問ひ給へりければ、「いづくの者とも人に知られで、この村に住みても二十日ばかりなり」とぞ答へ侍りける。オ<u>この事、限りなくあはれに覚え侍り</u>。何と、げに世を捨つといふめれど、身のあるほどは、着物をば捨てずこそ侍るに、あはれにもかしこくも覚え侍るかな。

およそ、この上人はよろづ物狂はしき様をなんし給へりけるなり。ある時は、清水の滝の下に寄りて、合子といふ物に水を受けて、隠れ所をなん洗ひ給ふこと、常の態なり。いみじく静かに思ひ澄まし給ふ時も侍るめり。一方ならずぞ見え給ひし。澄み渡る心の内は、いつも同じさきらなれども、外の振る舞ひは百に変はりけるは、カ<u>よしなき人の思ひを、我のみ一方にはとどめじと思しけるにや</u>。

この上人ぞかし、中関白の御忌に、法興院に籠りて、暁方に千鳥の鳴くを聞き給ひて、

キ　明けぬなり賀茂の河原に千鳥鳴く今日もはかなく暮れんとぞする

と詠みて、『拾遺集』に入り給へり。明けぬるよりはかなく暮れぬべき事の、かねて思はれ給へりけるにこそ。かの『拾遺集』には円松法印と載りて侍るは、上人の事にこそ。

〔注〕　○御室戸――現在の京都府宇治市にある三室戸寺。
○ゑのこ――子犬。
○合子――ふた付きの容器。
○さきら――才知。
○中関白――藤原道隆。
○法興院――藤原道隆の父、兼家が別邸を寺としたもの。
○『拾遺集』――三番目の勅撰和歌集。ただし実際には『後拾遺和歌集』に、ほぼ同じ歌が「円松（または円昭）法師」作として載る。

設問

(一) 傍線部ア・イ・エを現代語訳せよ。

(二) 「かきくらさるる心地」(傍線部ウ)とは、何に対するどのような心情か、説明せよ。

(三) 「この事、限りなくあはれに覚え侍り」(傍線部オ)とあるが、語り手はなぜそのように感じたのか、説明せよ。

(四) 「よしなき人の思ひを、我のみ一方にはとどめじ」(傍線部カ)とはどういうことか、説明せよ。

(五) 傍線部キの歌は、どのようなことを表しているか、説明せよ。

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）

◇M1(684—13)

第三問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

人恒病執着。然亦不可概論。良繇学以好成、好之極名着。羿着射、遼着丸、連着琴与。夫着弈者、至屏帳垣牖皆森然黒白成勢、着書者、至山中木石尽黒、学画馬者、至馬現於牀榻間。夫然後以其芸鳴天下而声後世。何独於学道而疑之。

是故参禅人、至於茶不知茶、飯不知飯、行不知行、坐不知坐、発篋而忘扃、出厠而忘衣。念仏人、至於開目閉目、而観在前、摂心散心、而念恒一。良繇情極志専、功深力到、不覚不知、忽入三昧。亦猶鑽鐩者、鑽之不已而発焔、煉鉄者、煉之不已

而成(スガ)レ鋼(ヲ)也。

概(シテ)慮(おもんぱかリテ)ニ其(ノ)着(センコトヲ)一而悠(いう)悠(いう)蕩(たう)蕩(たう)、如(ク)ニ水(ノ)浸(スガ)レ石(ヲ)、窮(ニ)歴(ストモ)年劫(ごふヲ)、何(ノ)益(カ)之(レ)有(ラン)。

是(ノ)故(ニ)執滞之着(ハ)不(レ)可(カラ)レ有(ル)、執持之着(ハ)不(レ)可(カラ)レ無(カル)。

（雲棲袾宏『竹窓二筆』による）

〔注〕○羿着レ射、遼着レ丸、連着レ琴――羿は弓、遼はお手玉、連は琴の名人として知られる。

○弈――囲碁。　○牖――まど。　○森然――びっしりと。　○牀榻――ベッド。

○学道――ここでは仏道を学ぶこと。　○観在レ前――仏などを観想すること。

○三昧――深く集中した境地。　○鐩――火打石。　○慮――心配する。

○蕩蕩――ゆったりと気ままなさま。　○年劫――長い年月。

設問

(一) 傍線部a・b・dを平易な現代語に訳せ。

(二) 「何独於二学道一而疑レ之」(傍線部c)を、「之」の内容がわかるように、現代語に訳せ。

(三) 「如二水浸レ石」(傍線部e)とはどういうことか、簡潔に説明せよ。

(四) 「執滞之着不レ可レ有、執持之着不レ可レ無」(傍線部f)とはどういうことか、本文の趣旨を踏まえて説明せよ。

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）

第四問

次の文章は、一九五六年に発表された小説である。これを読んで、後の設問に答えよ。

小柄な痩せた男で、茣蓙でくるんだ苗木を背中にまっすぐに背負って、庭に立つと、

「ごめんください」

と、云って汚れた帽子をとって腰をかがめた。その、ごめんください、という挨拶が、女性的な声だけどどこか格式張っていた。顔つきはその声のように細おもての柔和な、むしろ伏目がちの弱気な表情だった。

「植木屋でございますが、今日は沈丁花を持ってまいりましたが……」

「植木屋さんなの」

しげのが縁先きへ出てゆくと、爺さんは背中から茣蓙の包みをおろしてひらいた。

「あら、小さいのね。いくら?」

「一本八十円ですが、二本ありますから、二本買って下されば、百三十円におまけいたします」

「お父さん、どうします。買いますか」

そして沈丁花を買うことになって、それがきっかけで、庭の周囲の七、八本の檜葉も、この爺さんが運んでくることになった。順吉たちのつもりでは、檜葉は目かくし用にとおもって頼んだのだが、爺さんの背負ってくるのは、いつも殆ど一尺ばかりの苗木だった。

「あら、そんなに小さいの?」

と、そのときもしげのは云った。爺さんは目を伏せ、気弱に、しげのの言葉を聞き流して、

「なに、すぐ檜葉は大きくなりますです」

と、答えて、自分で土を掘って植えた。

しげのはお茶を出したり、丁度昼飯どきには、そうめんを分けて出したりした。

たいてい日曜に来るので、順吉もいた。植木屋の爺さんは縁側に腰をかけ、お茶をのむときも、そうめんをよばれるときも、「いただきます」と云って手にとったが、その、いただきます、という調子には歌うようなひびきがあって、ちっとも卑屈なものがない。優しい顔をしている。

一度その姓名を聞いたとき、爺さんが、あんまり立派な名前なので、しげのは爺さんの前身に興味を持ったが、戦争中女房の実家の千葉県に疎開して百姓をやっていたつづきで、今は植木を売って歩いているのだ、ということしかわからなかった。伊志野剛直という、いかめしい姓名には似合わず、小柄のひょこひょこと歩く苗木売りだが、そのもの云いだけ、どこか変っている。しかも、順吉はその苗木屋を自分より年上とおもっていたが、見かけよりはずっと若く、まだ四十代で、小学生の女の子があるという。

しげのは心易くなり、今度は少し大きい樹を持ってきてくれ、と不満そうに云うのだが、そんなとき、伊志野剛直は、ちょっと悲しい表情をするような気がした。

「はい」

と答えて、伏目に前を見つめる。順吉は女房にばかり応対させて、自分はあまりものを云わなかったが、苗木屋の表情の悲しげなのに気づくのは彼だった。

しげのに云われても、その苗木屋のその次に持ってくるのはやっぱり一尺足らずの苗木ばかりだ。値が安いので伊志野の持ってくる度に、順吉の家では買い、小さな植木ばかり、雑然と植えた。木犀、乙女椿、くちなし、ざくろ、つつじなど。しかし伊志野剛直は、格式張った口調で、ときには自分の苗木に鹿つめらしい説明をすることもある。

「楓には、板屋楓、高尾楓などありまして、これは高尾でございます。紅葉のもみじと申しますは、この高尾楓の紅葉が、いち

ばん美しいので、その名をよぶようになりまして、城州は高尾山に多いところから、高尾楓と申します」

「ああ、なるほどね」

しげのが対手上手なので、伊志野は、この家へ来ると、安心したように縁側に腰をおろして、ときには、持って来た苗木を買ってもらえないときでも暫く休んで行ったりした。帰るときには、

「あ、お邪魔をいたしました。また、お願いいたします」

と、ゆっくり挨拶をして、莫蓙包みを背負って、ひょこひょこと帰ってゆく。両方でなじんで順吉の家では、次ぎ次ぎにその庭の殆どが伊志野剛直の苗木で埋まっていった。しかしその庭は残念ながら腰より高い樹木はないのだった。

が、順吉は、二年ばかりの間に、近所に新しく建った住宅の玄関などが、ちんまりと植込みのできているのを、朝夕見ているうちに、わが家の前が依然としてむき出しなのを、少々もの足りなくなっていた。そして遂いにあるとき、三千円ばかりはずんで、これは本職の植木屋に頼んで、冬も落葉しない樹をという注文で、樫の木、柊などを植えることにした。そのとき順吉は、伊志野剛直をおもい出して、ア彼に気の毒なおもいをさせるような気がした。三千円といえば苗木屋の二年間に運んだ植木代の倍であった。

その日曜日、本職の植木屋は、いかにも本職らしいいでたちで、若いものひとりを使って、軒まで達する高さの樫の木をリヤカーで運び、高声の早口で配置の位置を指定したりしながら、深く土を掘った。樫の木には支えの添え木も二本つけて縄で結き、その下には柊や、つくばねうつ木や、黄楊を植え、片方には、おまけだといって篠竹も植える筈だった。順吉は馬穴の水を運んだりして手伝っていたが、彼が内心で気づかっていたとおり、丁度その最中に、苗木屋の伊志野剛直が、いつものように莫蓙包みを背負ってやって来たのである。

「あ、ごめんください」

伊志野は、本職の植木屋には顔を合せず、いつものように縁先きに来て腰をおろした。しげのもやはりいつものようにお茶を出して、

「おじさんに大分植えてもらいましたけどね、玄関さきだけ、あんまり淋しいから、大きな樹を一本入れるんですよ」

と、言訳をした。

「は、お立派になります」

「そんなにはねえ、お金をかけないから」

さすがにその日は莫産を解かず、

「また、お願いいたします」

と立った。

「ええ、また、来て下さいね。今日はすみませんでした」

順吉の方は、苗木屋に顔を合わせることができないで、隠れるようにしていた。順吉にはそんな気の弱いところがある。気が弱いというよりは、伊志野に対して、いささかの裏切りをしたような、自分を責めるおもいさえ彼は感じていた。

植込みの終った玄関先きに、彼は満足しながらも、その夕方、しげのと膳に向ったとき、

「あのいつもの植木屋の爺さん、厭な気がしただろうねえ」

と、云っていた。しげのの方は割り切ったように、

イ「だって、あのおじさん苗木ばっかりですもの、仕方がないですよ」

「また、来るかね」

「もう、うちの庭も広くないもの、植えるところもないですよ」

ところが、伊志野剛直は、それっきり、この家の庭先きに姿を現わさなくなったのである。もうそれから一年経つ。ウ苗木屋の植えた囲いの檜葉は倍の丈に伸びて、結構、形を成した。

大田順吉は、苗木屋の伊志野剛直が、この庭に、というより、順吉夫婦に親しみを寄せていたとおもう。だから、順吉が本職の植木屋を入れたとき、彼を裏切るような、うしろめたさを感じた。それ以来、伊志野剛直がこの庭に姿を現わさない、ということ

で一層順吉は、彼を傷けたおもいが消えない。

伊志野剛直はいく度、しげのが、も少し大きい樹を、と云っても、苗木しか持って来られない事情があったのであろう。本職の植木屋とゆき合ったとき、彼は、だから引け目を抱いたのにちがいない。

だが、それ以来ぱったり姿を見せない、ということは、伊志野剛直の誇りなのか。

今日順吉は、勤め先きの家具製造店で厭なおもいをした。

彼は、請求書の計算をまちがえたのである。若い店員がずけずけと店主の前でそれを云い、順吉は一言もなかった。こんなとき、順吉は自分の年齢を引け目に感じた。ふっと心のどこかで、姿を現わさない苗木屋の誇りをおもい出していたような気がする。

「あの、植木屋の爺さん、どうしたかね」

と、順吉はしげのに声をかけた。

「あれっきり来ませんね。やっぱり苗木売って歩いてるんでしょうにね。まだ小学校にゆく子がいるといってたけど、少し変ってましたよ、ね」

しげのには、伊志野剛直の誇りはわからないらしい。大田順吉は黙ったまま、あの苗木屋に対する自分の裏切りと、そして再び姿を見せぬあの苗木屋に、エ同感とも羨望ともつかぬ、なつかしさを、じいっと感じて立っていた。

（佐多稲子「狭い庭」による）

〔注〕 ○一尺――約三〇・三センチメートル。

○城州は高尾山――山城国（現在の京都府南部）の高雄山。

設問

(一) 「彼に気の毒なおもいをさせるような気がした」(傍線部ア)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(二) 「だって、あのおじさん苗木ばっかりですもの、仕方がないですよ」(傍線部イ)とあるが、なぜそのように言ったのか、説明せよ。

(三) 「苗木屋の植えた囲いの檜葉は倍の丈に伸びて、結構、形を成した」(傍線部ウ)とあるが、ここからどのようなことがうかがわれるか、これまでの経緯を踏まえて説明せよ。

(四) 「同感とも羨望ともつかぬ、なつかしさ」(傍線部エ)とはどのような心情か、説明せよ。

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）